

超高齢者(80歳以上)に対する冠動脈外科治療戦略とその成績

天野 純 信州大学医学部附属病院心臓血管外科

高齢社会となったわが国では、冠動脈バイパス術をはじめとする冠動脈疾患に対する外科治療の対象が、年々高齢化し、かつては高齢のために手術適応とされなかった超高齢者(80歳以上)の症例に対する手術が、最近では日常的に行われるようになりました。

当院でも、10年前の冠動脈バイパス術の平均年齢が約65歳であったのが、現在では約75歳となり、最近の日本冠動脈外科学会の全国アンケートの結果でも、70歳以上の手術症例が約半数以上を占め、80歳以上の患者も10%に近づきつつあり、毎年増加しています。高齢者は、冠動脈疾患以外に全身の動脈硬化症、とくに脳血管障害をはじめ大血管・末梢血管の動脈硬化症、腎不全、糖尿病、高血圧、呼吸器疾患、認知症、透析患者などさまざまな合併症がみられ、また、がんなどの既往症や手術歴があるなど、手術リスクが非常に高く、緊急手術となる頻度も高くなっています。

このように超高齢者が高齢であること自体に加えて、さまざまな合併症をかかえていることが、手術の主要なリスクファクターとなっていることが報告されています。したがって、超高齢・ハイリスク症例における冠動脈疾患に対する外科治療について、その外科治療成績を向上させるためには、手術適応、術式の選択をはじめ周術期の管理などの治療戦略をどのように構築していくかがきわめて重要となっています。とくにoff-pump bypassが安全に施行されるようになって手術が低侵襲化するとともに、PCIとのハイブリッド治療などを選択することによって超高齢者に対する手術適応の拡大が図られ、治療成績が徐々に向上しています。

本特集では、冠動脈外科の分野における代表的な施設において、現在アクティブに第一線で活躍されておられる新進気鋭の先生方に、それぞれの施設における症例とその特徴をもとに、超高齢者に対する外科治療戦略とその成績や問題点についてご執筆いただきました。

時宜を得た本特集が、これからますます増加すると考えられる超高齢者の外科治療の成績向上に寄与することを願ってやみません。